

揭示伝道と法話の良材

仏教俳句歳時記  
一  
目  
次

鐘ひとつ売れぬ日はなし江戸の春 其角

鐘は、お寺の梵鐘・釣鐘や半鐘などのこと。今はもちろん、江戸時代の昔も鐘は滅多に売れるものはありません。しかし江戸の町は、そんな鐘でさえ売れない日はないと言っているくらい活気にあふれている、というのですから、当時から江戸がいかに大都市だったかがわかります。この「春」は季節というよりも、繁栄を意味しているのでしょうか。ついでに鐘の夫婦の笑い話をひとつ。

撞木が鐘にいました。「世間では私たちのことを仲のいい夫婦といってるけど、どうしてかしら」鐘「そりゃ、おれはこうして鎖で繋がれているし、お前は上のかぎに掛けてあるし、離れようにも離れられないんだから、いつまでも仲よく暮らすしかないのさ」というと、撞木はにっこりして、「だから、私はあなたが愛しうゴンす」

春立つや愚の上に又愚にかへる 一茶

小林一茶が、六十一歳の還暦を迎えた年のはじめに詠まれた句です。

六十年で生まれた年の干支に還るので「還暦」といい、本卦還りともいいます。還暦は、本来の自分、何もかざらない自分に還ることを自覚する年でもあるでしょう。

六十年の生涯を顧みて、わが身の愚かさは昔と少しも変わっていません。すこしは賢くなったと思うような人がいたら、それはそう思っているだけのことだろう。しかし、人はどうであれ、私はおのれの愚かさをよくわきまえ、愚の上にさらに愚を徹していくだけである……という感懐が述べられています。人は年を取るにつれ、世間的な知恵がついてきますが、徒に小賢しくなるより、自分は凡愚であると自覚しておく方が大切ではないでしょうか。

時候

●春 陽春 芳春

山寺の春や仏に水仙花 也 有  
腸に春滴るや粥の味 夏目漱石  
春なれや爪美しき弥陀如来 松野自得  
女身仏に春剥落のつづきをり 細見綾子

●二月/睦月 睦月||旧暦一月の異称。

梅檀のほろ／＼落る二月かな 正岡子規  
墓石みな日を浴びてゐる二月かな 加藤覚範  
法堂や二月厳しき松の幹 渡辺水巴  
山深く睦月の仏送りけり 西島麦南

●立春 春立つ 立春大吉 新暦二月四日ごろ。

門に貼る立春大吉のお札かな 無事庵  
雨の中に立春大吉の光あり 高浜虚子  
落葉焚いて春立つ庭や知恩院 同  
みほとけの奈良に目覚めて立春や 大野林火

●春浅し

百日と云ふ開帳の春浅き 波 空  
春浅き椎茸の香や精進日 小塚禽化  
じく／＼と庫裡の敷藁春浅き 菅原師竹

在叡時代の宗祖聖人を偲びて

春浅し常行堂の燈の幽か 山田文昭  
西門の浅き春なり天王寺 河東碧梧桐  
平穩の日々に感謝や春浅し 山下満智子  
地獄絵の鬼が溢るる春浅し 榎本愛子  
春浅し日向薬師の藪の径 星野麦丘人  
春浅く娘のうつし絵に香一縷 波多野粉川  
春浅し寺の奥より川みえて 井上 雪

●冴返る 寒戻る

仏燈の冴返りつゝ油尽く 胡 鏡  
なにがしの忌日ぞけふは冴え返れ 正岡子規  
人に死し鶴に生れて冴返る 夏目漱石  
仏燈に暮れせまり誦経冴え返る 大谷句仏

献立の物冴返る忌日かな

安斎桜碗子

季節はもう春なのに、寒さがぶり返し、空気が冴え冴えとして身にしみることを「冴え返る」といいます。

忌日の献立は、亡くなった人（精霊）にお供えする「お霊供（お料供ともいう）」という意味なら、御飯、汁、壺碗（煮豆類や和え物など）、平皿（野菜の煮物）、高つき（季節の酢の物）をお膳に並べて仏前にお供えします。

あるいは法要が終わった後で親戚縁者に出す料理かもしれないが、いずれにしても身も心も冴え返る気持ちでお供えし、またいただく法事のお膳です。

なお、寺院の諸仏諸尊にお供えするお精進供（お生身供）は、生野菜や乾物類、また山・海・里の幸を調理せずに膳の上に盛り合わせて供え、箸は添えません。（参考：新開真堂『仏教ものしり袋』）

山寺に菟藪売りや春寒し

村上鬼城

山寺は文字通り、山の中にある寺をいいます。

山寺や縁の下なる苔清水 几 董

山寺や誰も参らぬ涅槃像 檜 良

山寺や蝙蝠出づる縁の下 村上鬼城

山寺の扉に雲あそぶ彼岸かな 飯田蛇笏

と詠まれるように、山寺は高地にあって水清く、月も澄み渡り、いつも森閑とした雰囲気があります。

そんな山中の寺へ、しかも春寒料峭の時節に重い桶をかついで菟藪売りがやって来たというもの。

ところでお寺と菟藪売りで思い出すのは、『こんにやく問答』という落語。こんにやく屋の主人、六兵衛が、ひよんなことから禅寺の大和尚になりすまし、旅の雲水に問答をしかけられるが、珍妙無類の応対をして、見事に勝ってしまうという話。

機会があったら、ぜひ聞いてみてください。

高野山

山がひの杉冴返る罅かな  
いくたびか死におくれし身冴返る  
冴え返る精舎の春の雲井かな

● 余寒

僧返る竹の小道の余寒哉  
拝観の菩薩にのこる余寒かな  
酒やめて酒の功德の余寒かな  
世を恋うて人を恐るる余寒かな  
大寺に沙弥の炬を守る余寒かな  
大伽藍出でて余寒を払ひけり  
忌の人のおもかげ小さく余寒なほ  
通夜余寒火葬許可証ふところに  
ひらぎ見る手になにもなき余寒かな

● 春寒し 春寒

春寒し泊瀬の廊下の足の裏

太 祇

\* 泊瀬：初瀬とも書き、奈良県桜井市長谷寺のこと。

春寒や竹の中なるかぐや姫  
春寒や道ほそぼそと阿弥陀堂  
春寒し水田の上の根なし雲  
春寒し子の愛憎に我を耻づ  
春さむく尼僧のたもつ齡かな  
結願の地藏洗ひや春寒し  
春寒の闇一枚の伎芸天  
春寒や吹き寄せられて遊女墓  
釣鐘に袖触れつ春寒き寺  
春寒の老僧ちじみやまぬかな  
春寒の灯影つくづく女身仏  
春寒や俄かに鳴れる母の三味  
本門寺道春寒の家並かな  
又一つ病身に添ふ春寒し  
春寒し人死んで医師残りたる  
会ひ得たるされど死顔春さむく  
春寒し地藏の見えぬ地藏岳

日野草城  
阿波野青畝  
河東碧梧桐  
同  
飯田蛇笏  
素 泉  
古館曹人  
増田 守  
泉 鏡花  
金子兜太  
行方克己  
岸田稚魚  
大場白水郎  
松本たかし  
相馬遷子  
佐々木麦童  
大木あまり